

士族の商法

三遊亭円朝

青空文庫

上野の戦争後、徳川様も瓦解に相成りましたので、士族さん方が皆夫々御商
 売をお始めなすつたが、お慣れなさらぬから旨くは参りませぬ。御徒士町辺を通つて
 見るとお玄、関の処へ毛氈を敷詰め、お土蔵から取出した色々のお手道具などを並
 べ、御家人やお旗、下衆が道具商をいたすと云ふので、黒人の道具商さんが掘出物
 を踏み倒にやつて参ります。「エ、殿様今日は。士「イヤ、好い天気になつたの。
 「ハイ、エ、此水指は誠に結構ですな、夫から向うのお屏風、三幅対の探幽の
 お軸夫に此霰の釜は蘆屋でげせうな、夫から此長二郎のお茶碗——是は先達も
 ちよいと拝見をいたしましたがこの四品でお幾らでげす。士「何うもさう一時に纏め
 て聴かれると解らぬね、此三幅対の軸は己の祖父が拝領をしたものぢやがね、釜や何
 かは皆己が買つたんだ、併し貴様の見込で何の位の価があるぢやらう、此四品で。「左
 様でげすな、四品で七円位では如何でげせう。士「ヤ、怪しからぬことを云ふ、釜ばかり
 でもお前十五両で買うたのだけ。「併し此節は門並道具屋さんが殖まして、斯様な品
 は誰も見向きしないやうになりましたから、全然値がないやうなもんでげす、何うも酷く
 下落をしたもんで。士「成程ハ左様かね、夫ぢや宅へ置ても詰らぬから持てつて呉れ、

ついで其所に大きな瓶があるぢやらう、誠に邪魔になつて往かぬから夫も一緒に持て行くが宜い。などと無代遣つたり何かいたし誠にお品格の好い事でござりました。是は円朝が全く其の实地を見て胆を潰したが、何となく可笑味がありましたから一席のお話に纏めました。処が当今では皆門弟等や、孫弟子共が面白をかしく種々に、色取を附けてお話を致しますから其方が却て面白い事ですが、円朝の申上げますのは唯実地に見ました事を飾りなく、其盤お取次を致すだけの事でござります。小川町辺の去る御邸の前を通行すると、御門の潜戸へ西の内の貼札が下つてあつて、筆太に「此内に汁粉あり」と認めてあり、ヒラリ〜と風で翻つて居つたから、何ぞ落語の種子にでもなるであらうと存じまして、門内へ這入つて見ましたが、一向汁粉店らしい結構がない、玄関正面には鞞形の襖が建てありまして、欄間には槍薙刀の類が掛つて居り、此方には具足櫃があつたり、弓鉄砲杯が立掛つてあつて、最も厳めしき体裁で何所で喫させるのか、お長家知ら、斯う思ひまして玄関へ掛り「お頼ウ申ます、え、お頼ウ申ます。「ドレ。と木綿の袴を着けた御家来が出て来ましたが当今とは違つて其頃はまだお武家に豪い権があつて町人杯は眼下に見下したもので「ア、何所から来たい。「へい、え、あの、御門の処に、お汁粉の看板が出て居りまし

たが、あれはお長家ながやであそばしますのでげせうか。「ア、左様さやうかい、汁粉しるこを喰くに來たのか、
 夫それは何どうも千萬せんば辱めない事ことだ、サ遠慮ゑんりよせずにはから上あれ、履物はきものは傍わきの方ほうへ片附かたづけて置
 け。「へい。「サ此方こつちへ上あれ。「御免ごめん下くださいまして。……是これから案内あんないに從したがつて十二じふ畳
 許ばかりの書院しよゐんらしい処ところへ通とほる、次つぎは八畳はつじふのやうで正しやうめん面とこの床とこには探たん幽ゆうの横物よこものが掛かり、
 古銅ことうの花くわびん瓶びんに花はなが挿さしてあり、煎茶せんちやの器械きかいから、蓆たばこ盆ぼんから火鉢ひばちまで、何いづれも立派りつぱ
 な物ものばかりが居ゐます。「ア、当たう家けでも此この頃ごろ斯かういふ営業えいげふを始はじめたのぢや、殿様とのさまも
 退屈たいくつ凌しのぎ——といふ許ばかりでもなく遊あそんでも居ゐられぬから何なにがな商しやう法はふを、と云いふのでお
 始はじめになつたから、何どうかまア諸方しよはうへ吹聴ふいちやうして呉くんなよ。「へいへい。「貴様きさまは何なんの
 汁粉しるこを喫たべるんだ。「え、何所どこのお汁粉屋しるこやでも皆みなコウ札ふだがピラ、下さつて居ゐますが、エへ、
 彼あれがございませぬやうで。「ウム、下札さげふだは今詔いまちうらへにやつてある、まだ出來できて來こんが蠟色ろういろに
 して金蒔絵きんまきゑで文字もじを現あらはし、裏表うらおもてとも懸かけられるやうな工合くあひに、少し氣取きとつて注文じゆんをし
 たもんどちやから、手間てまが取とれてまだ出來できぬが、御膳汁粉ごぜんじること云いふのが普通なみの汁粉しるこで、夫それから
 紅餡べにあんと云いふのがある、是これは白餡しろあんの中なかへ本紅ほんべにを入いれた丈だけのものぢやが、口熱こうねつを冷却さま
 すとか申まうす事ことぢや、夫それに塩餡しほあんと云いふのがある、是これも別べつに製せいすのではない、普通なみの汁粉しるこへ
 唯ただだちよいちよいと焼塩やきしほを入いれるだけの事ことだ、夫それから団子だんご、道明寺だうみやうじのおはぎ杯なべがある

て。「へい、夫では何卒ソノ塩館と云ふのを頂戴したいもので。「左様か、暫く控へて居さつしやい。奥では殿様が手櫛掛で、汗をダク、流しながら館拵へか何かして居らつしや、奥様は鼻の先を、真白にしながら白玉を丸めて居るなどといふ。「エ、御前、御前。殿「何ぢや。「エ、唯今町人が参りまして、塩館を呉れへと申しますが如何仕りませう。殿「呉れるといふならやるが宜い。暫くするとお姫様が、蒔絵のお吸物膳にお吸物碗を載せ、すーつと小笠原流の目八分に持て出て来ました。「是は何うもお姫様恐入ります、へい、有難う存じます。姫「アノ町人、お前代を喫べるか。「へい、有難う存じます、何卒頂戴致したいもので。姫「少々控へて居や。「へい。慌て、一杯搔込み、何分窮屈で堪らぬから泡を食つて飛出したが、余り取急いなので、入を置忘れしました。すると続いてお姫様が玄関まで追掛て参られて、円朝を喚留たが何うも凜々しくつて、何となく身体が縮み上り、私は縛れでもするかと思ひました。姫「コレ、町人待ちや。」「へい、何か御用で。姫「これはお前の葎入だらう。「へい、是は何うも有難う存じます。姫「誠に粗忽だ、已後氣を附や。「へい、恐れ入りました。どつちがお客だか訳が分りませぬ。是から始まつたのでげせう、ごぜん汁粉といふのは。

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

士族の商法

三遊亭円朝

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>